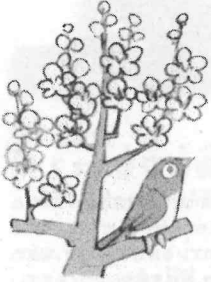


ほっとほっとタイムズ—第7号—

2023.2.27

井荻小学校 校内委員会



日差しに春を感じられる今日この頃です。皆様、いかがお過ごしですか。気が付けばもう学期末、月日の過ぎ去る早さを感じています。

春は、別れと出会いの季節。子供は子供なりに不安と期待を抱えています。それが、ちょっとしたところに態度として表れている気がします。そうした子供たちと、私たち大人はどのようにかかわればよいのでしょうか。

先日見たテレビで、心の残ったことを2つ、紹介します。

一つ目は、某番組で、「大人が何度叱っても子供がいたずらをやめないのはなぜ？」という質問がありました。皆さんはどう思いますか？その時の答えは・・・「叱るから」でした。子供は親が反応してくれるのを楽しんでいたずらを繰り返しているというので、試しに、いたずらをして親が無視していたら、そのうちすっとやめてしまいました。親が反応してくれるのを待っていたのは事実です。そしてもう一つ、専門家の話は「子供は理性ではなく感情で動く」でした。いたずらしてハイテンションになっているときにどんなに注意しても入らないのです。落ち着いたところでなぜやめてほしいのかを話して聞かせるとそれ以降しなくなったということです。

もう一つは、雪だるまに話をさせると子供はどう反応するかというものでした。小学校に入るか入らないくらいの子供に雪だるまから話をさせると・・・。はじめ不思議がっていた子供も会話をし始めました。そして、「魔法でしゃべれるけど、大人に話す魔法が切れるから言わないで」と伝えると、なんと子供は必死になって雪だるまを守る行動に出ました。陰でビデオを見ていた親は、わが子の姿に驚き、感動していました。大好きな親に黙ってまでも雪ダルマ(他人?)を守ろうと自ら判断し、行動する力をこんな小さな子供でももてるのです。

「子供」をどう見るのか(「児童観」とも言います)。大きな問題です。機械や人形と同じように「感じる心がない」と考えれば、「強く叱って大人の力でできるようにする」ことも効果があるかもしれません。しかし、実際には1歳になるかならない赤ちゃんですら感じる心をもっていることが証明されています。子供の心に寄り添い信じない限り、子供に力をつけることはできないのではないのでしょうか。

学校は集団生活の場です。いつでも誰かに守ってもらえるわけではありません。ちょっとしたことからトラブルになることは多々あります。大人もそうですが、心がギリギリの状態になると、自分の壁を守ることに必死になり、他の人の言葉を受け入れる余裕がなくなって、トラブルは大きくなってしまいます。好き好んで人に嫌われたり意地悪をしたりする子は、まずいません。また、良いこと悪いことの区別がつかない小学生もあまり見かけません。「わかっているやってしまう」場合がほとんどです。そして「自分はまた失敗してしまった！」と自分をマイナスにとらえています。そこを理解しないまま叱ると、子どもは反発するかウソをつくかできなくなってしまうのです。大事なことは、なぜ、何に対して精一杯になっているのか。その原因を子供と一緒に考え、子供に寄り添い、心の余裕を取り戻してやることではないのでしょうか。(魔法の言葉は「どうしたの?」です。)

よく見ると子供たちは小さいときから競争社会の中で生きていないと思いませんか。わが子が何かできるようになることは親にとって大きな喜びであることは確かです。でも、人より早く走る、人より良い点数をとる、人よりサッカーがうまい……。いつもいつも誰かと比べられていたら、大好きな親の期待に応えようとする子供は疲れてしまいます。人に勝つことより大切なことは山ほどあります。早ければよいということではありません。その子の成長に合わせてともに喜んでやれることができれば、大人も子供も楽になるのではないのでしょうか。

ありのままの自分(失敗した自分も)を安心して出せる場があるといいですね。そして、「大丈夫、次、頑張ろう」と言ってあげることができれば、どの子も素晴らしい力を発揮するのではないのでしょうか。

